

近世獨逸猶太族とハインリッヒ・ハイネ：ハイネの 猶太思想を中心として

服部, 哲郎

<https://doi.org/10.15017/2341020>

出版情報：史淵. 17, pp.91-119, 1937-12-05. 九州帝国大学法文学部
バージョン：
権利関係：



近世獨逸猶太族とハインリッヒ・ハイネ

——ハイネの猶太思想を中心として——

服 部 哲 郎

- 一、序 論
- 二、ハイネと「青年バレスチナ」
- 三、ハイネとロマンチツク
- 四、改宗問題
- 五、ハイネとポリテイク
- 六、ハイネとヘレニスムス
- 七、結 論

十九世紀前半期は、猶太文化の歐羅巴文化世界への目醒しき進出と、それに伴ふ兩文化の特異なる融合に於て、極めて著しき文化現象を展開した。尤もこの文化現象の史的意義に就ては、若干の否定的見解が行はれないでもなかつたが、其等は多く偏見的なものに過ぎないか、若くは傾向的な思想を背景とするものに

限られてゐた。① 著名なる近世猶太史家ド・ブノフ (Duhnoff) はこの文化融合の史的意義に就て次の如く述べてゐる。「猶太文化の獨逸文化への接近は、前者を富ましめ、その融合は反對に後者を豊かにした。この同化が徹底的に遂行せられ、猶太文化が全くその環境の中に消化し盡された時、兩文化の化合體は、屢々獨逸文學の土壤の上に絢爛の花を咲かしめた。蓋し猶太思想が歐羅巴思想の中に溶解することに依つて、そこに或る驚くべき力が來り宿つたからである。」と。②

さて、斯くの如き素晴しき文化媒介の事業達成のために猶太族がその文學的陣營より派遣した二人の秀でたる選士があつた。即ちハインリッヒ・ハイネ (Heinrich Heine) とルドルフ・ベルネ (Rudwig Boerne) である。「共に反動の時代に生き、共に環境の壓力下に基督教へ改宗したが、而も胸奥深き所に於ては、結局猶太人として止まり、猶太の劍を振翳して基督教世界に怒號した戰士達、その機智に於ては、因よりその眞理への衝動に於て、その隱蔽曲飾に對する憎惡に於て、將又その虚偽・隸屬・權利侵害・人間屠殺に與する教會精神の侮蔑に於て、等しく猶太的なりしのみならず、ハイネよりベルネに一層強く現はれた民主的・政治的自由の感情に於て、或はベルネよりハイネにより深く刻まれてゐたスピノザ的分析的精神に於て、共に猶太的精神をその本源としてゐた」③ 意味では等二人の選士は頗るその軌を一にするものと云へよう。

ところで、今、吾々が本論に於て取扱はんとするはベルネに非ずしてハイネである。然らば何故に特にハイネを選んだのであるか。行はれたる選擇に就ては一言の釋明を必要とするであらう。

先づ理由の第一として、兩者の史的地位の類似性が決して直ちに史的地位の同等性を意味しないと云ふことを指摘しなければならない。言ひ換へれば、直情純眞なるベルネは、後世を驚かすと云ふよりも寧ろ時代と生死を共にした類の人物で、従つてその時代に及ぼした影響は（就中政治的活動の分野に於て）、決して小さいものではなかつたにしても、到底深刻多面なるハイネの文藝的天分に及ばず、その歴史性とも云ふべき點に於ては、殆んどその比ではなかつたのである。④ 第二にハイネはその猶太的性格の強度に於ても、實は遙にベルネを凌駕し、従つてその時代に即して論じて、前者の方が一層高度に時代の獨逸猶太族を代表し得たと云ふことである。かゝる事情はグレッツ (H. Grätz) を始めフリーブソン (M. Philipson) 等の猶太史家の夙に喝破した所で、就中、前者はその名著「猶太國民史」に於て、二者の性格比較論をして次の如く述べてゐる。「若しベルネの魂が、恰も清らかな砂礫の上を潺々ト流れて、唯、暴風が水面を掻き亂す時の外は騒ぎ無き澄明な泉の水の如きであるならば、ハイネの魂は、その水面に陽光を戯れしめ、虹色を輝かせつゝ、而も一度近寄る船あらば忽ち荒れ狂ふ水底に引き入れ、若しもその船の造作が頑丈でない時は、之を破碎し去る様な渦卷く水流にも似てゐる。」と。⑤

最後に第三の理由として、ハイネを繞る永き論難を挙げなければならない。元來この論難は、ハイネの死後を以て始めて發生したものでなく、既にその生存中、彼が獨逸を去つてパリに移住した頃から起つたものである。今、ハイネ論難の輪廓を概観せんに、それは要するに、彼が國民的感情を缺如し、ボナパルトとその國佛蘭西を讃美して、獨逸と獨逸的なる凡てのものを罵倒したこと、而も其の場合、罵倒は只

に非獨逸的なるに止らず、實に反獨逸的であつた點を強調論難するものである。併し勿論その様な點は、論難の表面的結構に過ぎず、寧ろ論難者達の標的は、ハイネがその反獨逸的言論の背後に藏してゐたと見られた猶太的精神(Judentum)そのものに在つたのである。何となれば、若し彼等が單に反獨逸的なるの故を以てのみハイネを攻撃したとすれば、當然彼等は同じ矛を、彼等の最も尊敬する文學者ゲーテ(Gaethe)を始めシルレル(Schiller)ブラーテン(Platen)等々にも向けなければならなかつたであらうから。この故にヴルフ(max Wolf)はその著「ハイネ傳」(Heinrich Heine)に於て、ハイネ論難の真相に就き、次の様に記してゐる。「ハイネ以外の文學者達の此の種の不快な傾向は、史家の充分知悉する所なるにも拘らず、その爲に彼等の全作品が反國家的、反道德的、反宗教的なりとして非難されることは決してないのである。寧ろ彼等の場合には、その不快なる一面は彼等の行懸りの不機嫌の現はれとして、乃至は、一時的な氣紛れへの貢納として、或は最惡の場合ですら、突發的な脱線として解釋されたのである。ところがハイネの場合には、決してこの様な情狀の酌量はなされず、それ所か却つて彼がなした國家宗教並びに國民道德に對する攻撃は、ある隠れたる原理の現はれとして、換言すれば、あらゆる既成物を否定する猶太主義の顯現として看做されたのである。即ち、彼は一個人としてではなく、或る異民族の代表者として、又基督教精神並に獨逸精神と戦ふ、舌戦はざるを得ない或る異宗教の代辯者として監視されたのである。」^⑥

斯くの如きハイネ論難の典型的な一例として、次に文學史家バルテルス(Bartsch)の所論を参照しよう、

「惟ふに文學とはその國民に固有なる本質の發露である。従つてこの本質から流露したものゝみが眞に價

値を持つわけである。故にあらゆる國民は、當然外來の影響を抑壓し、克服し、且つ自國化する權利を有する。然るに今や、凡そ歐羅巴諸國民とは、その國民性に於て全く縁遠き異民族が獨逸文學の世界に登場し、唯に外部からその勢力を押し付けんとするのみならず、内部から獨逸の言語と文化とを利用しつつ、終にはこの世界に寄生し、之を蠶食し、更には自己の勢力を扶植し、以てその世界支配を實現せんとしてゐる。是即ち青年獨逸派の眞相であり、就中ハイネに於て、吾々はその最も著しき顯れを見る。蓋し彼には、國民的本能が全く缺けてゐたのである。然るに世には説をなして、ハイネの大膽な比喻と人を笑はしめる憂愁とは、獨逸的創作であると云ひ、或はハイネを以て素晴しき文章の偉大なる政論記者であり、獨逸語の表はす意味での雜錄記者(Feuilletonist)であると云つて、恰も雜錄的なのが獨逸的なものであるかの如く、又彼が獨逸に與ふるに香り高き散文と、眞の詩の代りに、褪色した雜錄の如きものを與へたとを以て、忌むべき呪咀でなかつたかの様に考へてゐるものがある。併し、それは誤謬である。成程ハイネは、自ら能ふ限り獨逸的教養を習得せんと努め、又事實習得してもゐたとは云へ、而もその精神に於ては、疑ひもなく眞正の猶太人として終始したのである。……兎に角獨逸主義は、嘗て猶太主義程に惡しき敵を持つたことはなく、又獨逸の藝術は、猶太教程に兇暴な破壊者に出逢つたことはない、云々」と。^⑦

この種の論難は單にバルテルスに止らずトライチケ(Trischke)その他の獨逸主義的傾向の論難者に殆んど共通なものと云へよう。

ハイネを繞る論難は今日決して落着してゐるのではない。寧ろヴォルフも指摘してゐる様に、ハイネ論

難は、それが結局に於て猶太教乃至猶太族開放を繞る論難である限り、従つて近世猶太族の歐羅巴文化世界への進出が投げかけた幾多の宗教的、政治的、經濟的問題が、平和的解決を見ざる限り、決して終局するこゝとならう。^⑧

註① Heinrich von Treitschke : Deutsche Geschichte des neunzehnten Jahrhunderts. B. III. S. 714. Adolf Bartels : Geschichte der deutschen Literatur. S. 323 例へば Treitschke の如きは此の文化融合期を以て「我が近世文學史上、最も不平なる時期」と見、又 Bartels は同時期の文學を文學史上 D. Kadenz に過ぎぬとしてゐる。

② S. M. Dubnow : Die neueste Geschichte des Jüdischen Volkes. (1789—1914). 1920. Bd. II S. 106

③ M. Philippon : neueste Geschichte des Jüdischen Volkes. Bd. I SS. 182—183.

④ ibid.

⑤ Heinrich Graetz : Volkstümliche Geschichte der Juden. Bd. III. S. 629—630.

⑥ Max Wolff : Heinrich Heine. S. 629.

⑦ Adolf Bartels : Geschichte der deutschen Literatur. S. 323.

⑧ M. Wolff : H. Heine S. 640.

II

ハイネと獨逸猶太族との交渉は、一八二一年彼がベルリンに到來した日を以て始期と見ることが出来る。蓋しハイネは、此の地に於て始めて「猶太人」として元服し、同族の仲間入をしたからである。尤も

「猶太人」が、ハイネに於て最初にその意味性を有つたのは、これより數年前ナポレオン没落の年迄溯り得る。即ち、ウ^キーン會議の結果、ラインランドにプロシヤの權力が復活し、反動主義に基く壓制が、同地の猶太族を再び以前の軛に繋いだ時彼は既に、「猶太人」としての社會的自覺に達し、それを機縁として獨逸主義よりの離脱を決意したからである。（ブルシエンシヤフトよりの脱退）

ハイネは中流獨逸猶太人の長男として、一七九九年十二月十三日① ラインランド・デュッセルドルフ（Düsseldorf）に呱呱の聲を擧げた。當時（嚴密には一七五五——一八〇一及び一八〇六——一八一三）デュッセルドルフはフランスの治下に屬して、夙に解放の恩恵に浴し、就中ナポレオン法典實施後は、同地の猶太族は、基督教徒と殆んど同等の市民權を許與されてゐた。従つて若き日のハイネは、ベルネの如くゲッター（Ghetto）の惡しき印象に毒せられる事もなく、専ら佛蘭西より吹き來る「自由」の風を吸つて生長したのである。加ふるに彼は、教育的にも可成自由な近代的觀察の中に置かれ、一方猶太の傳統的生活にも余り親しむ機會なく、かくて彼が早くから「近代的自由の子」としての資質を示したことは、彼の後の書翰^②や、ストロートマンのハイネ傳（A. Strodman, Heine's Leben und Werke）に掲げられたるハイネの少年時代に關する記録や、興味深き挿話^③等に依つても之を窺ひ知ることが出來よう。

併し乍ら、一八二一年一月彼のベルリン入京は、彼の生涯に劃期的な意義を與へることゝなつた。彼は此處で當時の教養社會中、最も活潑な二つの猶太的勢力に遭遇し、それに依つて生涯消し難き印象を身に刻まれたからである。即ちその一つは、獨逸猶太族の文化的解放を目指す「青年バレスチナ」（Das junge

Palästina)なる知的勢力であり、今一つは猶太婦人ラーエル・レーヴィンのサロンを中心とする文學的勢力であつた。後者はハイネに「詩人としての靈感」を與へ、就中彼の猶太的活動を、特に文學的に色づけた點に於て頗る注目に價するが、之に對し前者は純全たる猶太主義の學徒群にしてハイネの其の後の思想活動の上に、最も決定的な影響を與へたものである。

惟ふに猶太教がその固化せる律法の拘果から脱出し、猶太民族が、その永き外部世界の壓制から解放されるに至つた事情は、近代人文主義の思潮の覺醒、及びその發展と並行しつゝ生起したのみならず、大部分は専らその直接の影響下になされたものである。即ち十八世紀後半に現はれた二人の獨乙君主フリードリッヒ二世 (Friedrich II) 及びヨーゼフ二世 (Joseph II) が積極的に猶太解放に乗り出した事、一方又ルソー (Rousseau) とヴォルテール (Voltaire) の自由思想、佛蘭西革命及びナポレオン猶太對策が、延いて獨乙猶太族の自主的解放 (Auto emancipation) を促進したこと等、何れも其の間の事情を示すものである。かくて解放戰役の時代には、獨逸猶太族は、獨逸國民と共同して外國支配と國民的屈辱の重荷を擔ひ、祖國愛の熱情を燃し、國民的義務の意識を強めた。この事はやがて彼等に政治的解放が約束される基因をなし、一八二二年三月十一日の勅令は、猶太族をもプロシヤ臣民と看倣し、之に廣汎なる國民的權利及び義務を附與することゝなつた。尤もこの政治上權利は、其後暫く保留され、その實施は、續く反動時代に大部分停止されて了つたが、而もこれら外部世界より猶太世界へ一度投ぜられた解放への刺戟は、猶太解放史上最も重要な一事を、決して消滅せしめなかつた。即ち猶太文化が以前の孤立的沈滯的狀態から、時代史

の生きた潮流の中に合流して、今や獨逸猶太族は、非猶太的祖國の同胞と相並んで凡ての權利と發展のために戦ひ續けるに至つたと云ふ一事である。反動時代に於ける反猶太主義者は、多く反自由主義者であり、反進歩主義的復古主義者であつた。この故に一八一五年以後の猶太史は、近代自由主義及び國家生活の發展史と不可分の關係に立つた。而も後者があらゆる動搖と反動にも拘らず、絶えずより高き段階へと進展して行つた様に、前者も亦この時期に數多の障害にも拘らず自由解放の上に大いなる進展を示したのである。^④

かくの如き歴史的氣運を背景として、進歩主義自由主義の濤に乗つて現はれたのが「青年バレスチナ」の一團である。吾々は此處で次に當然觸れなければならぬこの團體の性質及びその活動に就ての敘述を制限せられたる紙數の都合上、一切制愛しなければならぬのを遺憾とする。併し只一事丈け附記して置かう。即ち同團體の活動目的に就き、後にハイネが「ルドヴィヒ、マルクス覺書」に於て「それは歴史的猶太主義と、やがて世界制覇に到達するであらうと信ぜられてゐた近代科學との融合以外の何物でもなかつた」^⑤と記述した様に、この團體は、例へば從來のフリードレンデル (David Friedländer) やベンダヴィッド (Tazarus Bendavid) 一派の歐化主義を手段とした姑息な、従つて結局は保守的な猶太教改革運動などは凡を選を異にした、極めて進歩的な猶太科學研究機關であつたと云ふことである。

さてかくの如き猶太青年の運動が、最も活潑なる活動を始めた頃、ハイネはベルリンに乗り込み、間もなく同團の「船長」エドゥアルドガンス (Eduard Gaus) の紹介によつて、その一群に加入したのである。

この場合ハイネをしてかゝる團體に近づかしためた動機に就て、史家は種々の憶測を下してゐる。例へばドブノフは「歐羅巴文化と猶太文化との調和と云ふ漠然たる理想」なりとし、ストローマンは「近代科學精神との自由なる聯關」を強調し、更にメーリンクは「専ら社會的猶太族壓迫の方向に向けられたるハイネの關心」を指摘してゐる。ともあれこれら諸動機説の綜合は、吾々に次の一事を暗示するであらう。即ち當時既にハイネの胸中に目覺めつゝあつた猶太族意識が、自由主義てふ時代思潮と結合しつゝ漸次社會性を帯び來りつゝあつたと云ふことである。

彼が團體に加入したのは一九二二年八月四日であり、彼がベルリンを去つたのが翌年の五月であつたら、團體との直接の交渉は極短期間に過ぎなかつたとは云へ、（尤も文通による交友は、その後も永く續けられた）この交渉からハイネが受けた一切の影響は、やがて猶太史に對する彼の深き關心又研究となつて現はれ、更には彼が初期の最も著名なる散文「ラビ、フォン、バッヘラッハ」(Der Rabbi von Bacherach)となつてその創作の上にも顯はれた。のみならず影響が決して單なる猶太史的興味に止まらなかつたことは、例へば彼が「ラビ」の制作に就て次の様な告白を洩した時に、そこに既に彼の魂の深所にまで匂ひ寄らうとしてゐた猶太主義精神を看取し得ることに依つても自ら明かであらう。「私は云ひ難き愛を以つてこの作品の全結構を腦裏深く埋めてゐる。何としても是文は全く愛から出たもので、決して單なる名譽慾からではない。それどころか若し私が外的な伶俐の聲に耳を傾けるならば、斷じて此んたものを書かないであらう。私は之に依つて如何に多くの人々と仲違ひし、又自ら敵を招くであらうかを豫期してゐる。

併しそれと共に、これは愛から出たものであるが故に不滅の書となり、直ぐ消えて失くなる様な劇場の灯でなく、神の宮の永遠の光となるであらう云々^⑥と、ハイネの所謂「歴史的猶太主義」(Historisches Judentum)の萌芽は、彼に於て此の時、直ちに猶太的信仰の實を結ぶまでには立ち至らなかつた。のみならず改宗と云ふ突發的な暴風の爲に、一時その芽は摘み採られて了つたかとさへ見えた。併し少くとも、それは既に堅い愛(同族とその文化への)の蕾をもつてゐた。かくて一度地下深く張られた猶太主義の根は、決して枯れることなく、あらゆる瞬間、あらゆる間隙を狙つては絶えず伸び出ようとし、終に晩年に至つて麗らかな春に逢ひ、結實の秋を見出したのである。

註 ① ハイネの誕生日が十二月十三日であることは確實らしいが、それが果して何年であるかは今日尙未解決の問題である。Gustav Karpels はその名譽ハイネ傳 (Heinrich Heine, aus seinen Leben und aus seiner Zeit) 中に "über Heines Geburtstag" なる一項を設けてこの問題を詳論してゐる。同書に依ればハイネの生年に就ては一八〇〇年説、一七九九年説、一七九七年説、一七九八年説等あれども茲では Karpels に依つて一七九九年説に従ふ。

② Hugo Bieber: Heine Confessio Judaica. S. 18 (Brief an Moses Moser), S. 255 (Brief an Betty Heine) u. s. w.

③ A. Strodmann: B. I. (1867) SS. 14—15.

④ ibid. SS. 237

⑤ H. Bieber: Heine Confessio Judaica. S. 176 (aus "Ludwig Marcus")

⑥ ibid. S. 28 (Brief an Moses Moser)

近世獨逸猶太族とハイネリッヒ・ハイネ

悲しみの調も高く響けかし殉教の歌

そは燃ゆる情抑^{しころ}へて久しくも秘め置きし悲歌

人皆の耳を穿ちて魂の底まで響け

力こめて呪ひつゝ吾が招きしは千年の嘆き

老ひたるも若きもさては無情^{こころな}の丈夫^{ますらな}さへも

乙女等と共に歎けば野の花も夜空の星も潤むかと思ゆ

その涙かたみに寄りて流れゆく南の國

その涙一つに集ひ注ぎ入るヨルダンの溪谷^{たに}①

此章に於ける吾々の課題は、勿論ハイネの猶太思想に現はれたるロマン主義考察と云ふ意味に限られるのであるが、事情の如何を問はず、元來ハイネが果してロマンチストであつたか否と云ふ間は、矢張り吾々の場合にも最初の問でなければならぬであらう。是に就て吾々に先づ注意されることは、ハイネとその仲間（青年パレスチナ）の猶太史に對する興味が、主として中世イスパニヤ猶太族の所謂猶太ロマンチックの黄金時代に向けられてゐたと云ふことである。即ち所謂彼等の歴史的猶太主義に現はれたる「中世主

義」と云ふ點である。尤もこの「中世」はハイネの仲間には寧ろ眞理追求の對象として持ち出されたものであつたが、ハイネに在つては流石にその文學的傾向と相俟つて、専ら「夢幻の森」としてその詩情の向ふ所となり、それだけ確かにロマンチックなものであるとして現はれたのである。例へば上掲の詩はかの「ラビ、フォン・バッヘラッハ」の冒頭詩であるが、この詩を始め、その小説の全結構は、明白に看取し得る所のロマン主義的中世主義を吾々に呈示するであらう。従つてかのヴェルフがハイネとその仲間に冠するに「猶太のロマン主義者」なる名稱を以てしたことは、蓋し至當と云ふべきであらう。^②

併し乍らハイネの猶太思想に現はれたるこのロマン主義的傾向が、更に當時の獨逸猶太族間に擡頭してゐた中心的勢力とも云ふべきフリードレンデル一派の猶太教改革運動に對する反動として現はれたことは頗る注目に價する。「少數の疣眼切開醫達は猶太教と云ふ體に發生した致命的な皮膚膿種を放血に依つて治療しようとしてゐるが、それではイスラヘルは、彼等の無器用と誤診のために流血して死ぬ外はないであらう。……吾々は最早髯を生やす力もなく、斷食する力もなく、人を憎む力も又憎しみに耐へる力もないのだ。そしてそれこそ吾々の改革に對する動機ではないか。それにある一部の者共は、乞食役者の啓發と教育とを受けて、猶太教と云ふ舞臺に裝飾と側面背景とを施さうとしてゐるし、他の一部の者達は猶太と云ふ看板を掲げつゝその内に福音的基督教を採り入れようとしてゐる。……だがそんな店屋は長續きせず、就中哲學へ向つて振り出されたその手形は、支拂拒絶を喰つて送り返へされ、かくてその家は破産を來すであらう。^③」と。淺薄なる歐化主義、似て非なる近代主義に對して降されたる鐵槌である。茲に現は

れたるハイネの猶太觀は其の後の彼の思想的動向に對し極めて意義深き暗示を投げかけるものであるが、この點に就ては何れ章を更めて觸れる事にしよう。而も此等の言葉に就て注意される一層重要な事は、かの似而非近代主義を審くハイネ中世主義そのものの中に、却つて明かに近代の合理主義精神の包藏されたるを看取し得ること、吾々は實に此點にハイネ・ロマンス主義の特性を認めるものである。ハイネ・ロマンス主義に於けるこの様な合理主義的要素は其後彼の自由主義活動の進展と共に一層顯著となり、それ丈けその中世主義的要素は後退して、一時——と云つても相當長期間に亘つて——甚だ影の薄い存在となつたが、やがて又二月革命以後再び復活した。猶、此點に就ても今一度後章に於て觸れるであらう。

註 ① H. Bieber: S. 29

② M. Wolff: S. 461

③ H. Bieber: SS. 13—14

四

此處で吾々はハイネの改宗問題に就き一考を與へることにしよう。さて、歴史主義的猶太主義にその文學的熱情を傾倒しつゝあつた最中に、突然一八二五年一月二十八日ゲッチンゲンに程近き小邑ハイリゲンシュタットのセント・マルティニ教會に於てハイネが受洗して、ユダヤ教より基督教への轉向を決定した一事は、蓋し甚だ奇異の念を吾人に抱かしむるものである。是即ち彼の改宗問題を繞つて種々の論議が行は

あつたとしても、それは結局改宗に對する彼の心を gleichgültig なものにする様に作用したにすぎず、少くとも眞剣な良心的快惱から彼の改宗が誘發されたものでないことだけは斷言し得るであらう。

そこで次に吾々は彼の改宗問題が學位試験と學位稱號授與の日との間に突發した點に注目することに依つて、それがもつと切實な經濟問題を背景として發生したのではないかとするストロートマンの見解を検討することにしよう。この立場は或る條件の下に文學史家フラッツ・メーリンク④ (Franz Meining) の採る所の意見でもあるが、併し結局この立場も未解明の難點を包含せる點に於て、ドップノフの所説と異らない。即ち若し彼等の主張する様に生活の保證と云ふことがハイネにとつて唯一の緊急なる目標であつたならば、その後、間もなく法律の學位を得、市民としての途は拓かれ、かくて最早彼がハムブルグで辯護士を開業するのには何等の障害も無くなつたと見えた時に、何故に彼は市民として獨立した地歩を占むべく嘗つて一步の前進をも速かに試みようとしなかつたのであるか。之に對してメーリンクは一應「それは事務的にして無味乾燥なる仕事に對する嫌惡から」と應酬しては見たものゝ、彼自身満足しなかつた様に、それでは理由が餘りに貧困にして且つ薄弱ではあるまいか。

そこでヴァルフ⑤は遂に改宗の動機をハイネの利己主義と云ふ都合のいい、従つてそれ丈内容のないヴェールの背後に片附けて了つたのである。この見解は、利己主義と云ふものが人間の本能的屬性と見らるべき限りに於て、勿論全部的に否定され得ない強味をもつであらうが、それ丈當然の事を云つたに過ぎず、云ひ換へれば結局何も云はなかつたに等しい説明力の貧弱さを示すものと見られよう。のみならず、例へ

彼の家族が彼の出世のために頻りに受洗することを奨めた時に、彼が久しい間頑として之に應じなかつた事實^⑨や、既述の如く改宗直後の彼の意外な非利己的行動は、何れもこの見解にとつて相當不利な反證でなくてはならぬ。

況んやハイネの改宗を以てその戀愛問題に歸著せしめんとするが如きに至つては、最早滑稽と云ふべきか。

惟ふにこの種の柔かな見方はドンナ・クラ、(Donna clara)あたりに現はれたハイネ流の諷刺詩から故らに邪推されて生じたものではないかと思ふ。^⑦

然らば最後に吾々自身の見解は如何。先づこの問題の解明に當つて吾々に最も力強い光を投ずるものは、他ならぬハイネ自身の改宗に對する次の如き告白である。「若し受洗行爲が私に何等かの意味性を有つならば、それは恐らくは不幸な同胞の權利の爲めに私が一層よく貢獻し得るに至ると云ふことである。^⑧」即ち猶太族解放即受洗動機である。この見方を更に側面から強めて呉れるものは、當時ハイネと殆んど時を同じうして改宗を決行した青年バレスチナの「船長」エドゥアルド・ガンス(Eduard Gans)に對する意外にもハイネの痛烈極まる非難の言葉そのものである。

「君は十字架へ這つて行つて了つた

嘗つて君が輕蔑してゐたその十字架へ

それはほんの数週日前までは君が

近世獨逸猶太族とハイニンツヒ・ハイネ

足蹴にかけようとしてゐたものではないか！

おゝそれは余りに多讀したせいなのだ。

かのシュレーゲルやハラーやバークを

昨日までは尙英雄だつたのに

今日もう惡漢になつて了つたのか！^⑨

又曰く「コーン (Cohn) の保證する所に據ると、ガンスはキリスト教を説いてイスラヘルの子等を改宗させようとしてゐるそうだが、實に果然言ふ所を知らない。彼が若し確信する所あつてそうするのならば、随分戯けてゐる。併し僞信からそんな事をするとなれば彼は惡漢だ」^⑩と。(猶ほ註参照) 更に最も注目すべき言葉は彼がモーゼルへの手紙の中で、若しガンスがイスラヘルの子等を改宗させようとしてゐると云ふ消息の代りに、銀の匙を盗んだと云ふ知らせを聞いたならばどんなにましであつたらうと云つてゐることである。^⑪

ハイネの非難は勿論正鵠を得てゐない。それはストロートマンも指摘した通り、彼のガンスに對する人格的誤解から發せられたものにすぎないからである。ともあれ吾々は以上のハイネの言葉の中から、ガンス攻撃の重點が彼の改宗行爲そのものよりも、寧ろ、その反猶太主義的行爲に置かれてゐたと云ふ一點を理解すればよいのである。蓋し、然う理解することに依つてのみ、何故にハイネが彼と殆んど同時に改宗し

たガンスを、かくも憚りなく非難し得たかと云ふ疑問を晴し得るであらう。猶ほ茲にハイネの所謂「銀の匙を盗む」とは何の謂であるか。彼は今一度自己の改宗に就てもこの言葉をを用ひてゐる。「若しも私の受洗行為が、有利な光に包まれた私を君の眼に映すなら極めて残念だ。若し法律が銀の匙を盗むことを禁じてゐないならば私は決して受洗しなかつたであらう」⁽¹²⁾ 吾々はその言葉を、廣く、世界的覇權の奪取即ち猶太人の世界的勝利そのものゝ意味に解したい。又その様に解釋することに依つて吾々はハイネの改宗の意義及びやがてこの後に來るべき政治的活動への途を最も合理的に理解し得るであらう。

註 ① S. M. Dubnow : Die Neueste Geschichte des Jüdischen Volkes, S. 110

② M. J. Wolf : Heinrich Heine S. 55. 「當時のロマンチックの本質は、之を解明すること頗る困難である。それは概して何等統一的概念を構成せず、苟もロマンチックと云ふ詞の中に合流され得る限り、あらゆる思潮のまに／＼その色調も千變萬化してゐる。それは基督教主義に對立する獨逸主義を利用した點に於て國民的であるが、同時に英國人とイスパニヤ人とを模範とした點で國際的でもあつた。それは民議を復活させた點に於て民主的であるが、而も只藝術家と少數の選ばれたる人々のみを相手にして大衆を無視した點に於て甚だ革命的であるが、併し既成事物に對して膝を屈した點に於て矢張り權威的であつた。それはカトリック的神秘の深味に沈潜することに依つて信仰的であるが、宗教を單に慰みとしてしか觀察しなかつたことに依つて、矢張り非宗教的でもあつた」

③ Bieher : S. 18 (Brief an Moses Moser, Limburg, 27. Sept. 1829)

④ Franz meining : Zur Literaturgeschichte von Callerton bis Heine, SS. 264—5.

⑤ M. Wolf : Heinrich Heine SS. 637—638.

近世獨逸猶太族とハイネリッヒ・ハイネ

⑥ Bieber: S. 18.

⑦ *ibid.*: S. 20—23. この詩に於てハイネは猶太的血統が戀愛の障害をなす點を暗に諷示す。

⑧ Bieber: S. 18

⑨ *ibid.*: S. 65. (Einen Abtünigen)

⑩ *ibid.*: S. 64. この種のガンスに對する非難はずつと後年まで彼の持ち續けたものであつた。「猶太文化學術協會に關してガンスの振舞つた態度は何としても道義的でなかつたのみならず、最も許し難き反逆罪を犯したものと、殘念乍らそう云はざるを得ない。彼は煽動者の役割を演じ、議長の職責を身に帶してゐたのであるから、それだけ一層彼の離反は惡むべきものであつた。船が難破した時に船長は、常に最後に船を去るのが慣習上の約束であるのにガンスは先づ眞先に自分自身を救つたのである」(Bieber: *Heine Confessio Judaica* S. 175)

⑪ Bieber: S. 64.

⑫ *ibid.*

五

併し勿論歐羅巴世界への道は、最初彼にとつて決して幸福と希望に充たされた坦道ではなかつた。ヨーロッパ世界は却つてハイネの改宗てふ弱點を逆に利用しつゝ、一層手痛い攻撃の矢を以て彼に酬いた。例へばヴキルヘルム・ヘーリングの如きはハイネが改宗した年の秋、早くもヴキル年鑑 *Wiener Jahrbuch* に於て「アルマンゾール」(Almansor)の反基督教傾向を指彈し、それをハイネの隠れたる猶太主義に歸結するこ

とに依つて、先づハイネ反撃の火の手を擧げた。のみならず改宗したハイネの敵は、今や基督教世界に止らず、實に同族迄も擧つて彼の背信行爲を非難の的とするに至つた。遠大の希望をその第一歩に於て既に無慘にも打ち破られた彼は、流石に暗澹として深き憂怨に沈まざるを得なかつた。「私は今や基督教者から猶太人からも嫌はれる。私は受洗したことを痛く悔いてゐる。……何と云ふ皮肉なことか、改宗するが早いか猶太人だからと云つて惡評されるのだ。實際私はそれ以來全く不愉快だ」① この失意は終に小説「ラビ・フォン・バッヘラッハ」への熱情をさへも奪ひ、そのペンを掌から落して了つた、そして今や彼の前途に一切の光明が消え失せたかと思えた。

併し乍ら、幸なことに、結局この逆境は一時的事象として終り、一方彼の憂愁もそれに伴ふ幾分病的な現象に過ぎなかつたことが後に明かにされた。蓋し一八二六年以後「旅行記」(Reisebilder)や歌の本(Buch Lieder)を世に問ふて意外にも博した歡呼の嵐は、やがて彼の魂の傷手を癒すに充分であつたのであらう。獨逸は比類なき才氣煥發の彼が文章の中に時局の最も焦眉の問題の反映せざるを認め、その叙情詩の魅惑的な音楽の中に雅歌(Hohelied)や「傳道書」(Kohelen)の高き調べ、勝利する愛の讚美が「世界苦」の嘆きと共に奇しくも相和するを聴いた。②

ハイネはかくして既に自己の道を歩み始めてゐた。即ちポリテイクへの進出である。この新なる舞台に於て彼が打ち立てた旗幟は、云ふ迄もなく自由主義のそれであつた。秀でたる詩的天分をポリテイクに利用する巧みを充分に心得てゐたハイネ。自由主義てふ標語が、彼の唇からは全く新なる響と甘美な、魅

力とを湛へて全歐の空に響き渡つたのも蓋し故なしとしない。「吾々の時代の偉大なる使命とは何ぞや、それは解放である。只に愛蘭土人、希臘人、フランクフルトの猶太人、西印度の黒人及び之と同種の壓迫されたる民族の解放でなくして寧ろ、全世界の解放である。」^③ 彼は今や「人類解放の勇敢なる戰士」であつた。而もこの時フランスに勃發した七月革命はハイネの自由主義活動に一層の拍車を加へた、彼は狂喜しつ自由の國、佛蘭西へ走り、其處で最も華々しき政治活動を開始した。以來二月革命に至る迄十數年間「ロマン派」(Die Romantische Schule)「獨逸宗教及哲學の歴史」(Zur Geschichte der Religion und Philosophie in Deutschland)を初め、彼に依つてバリーの空から放たれた幾多の自由主義の巨彈は、相次いで反動主義世界に落下しつゝ全歐を震駭せしめた。

ところで茲に注意されることは、この活動期を通じて彼の自由主義言論が猶太問題に對し言及の積極性を示さず、云ひ換へればハイネのポリテイクが必ずしも直接に猶太族とその宗教を代表してゐないと云ふことである。併しこれは前にも一言觸れた如く既に改宗以來の彼の豫定行動と見るべきであらう。従つて彼にあつては、この種の行動は決して理由なしに行はれたのではなく、而もその理由たるや斷じて云はれてゐる様な怯懦でも、利己心でも、將又不信でもなかつたのである。この點を一層明かにするために吾々は今一度ハイネ自身をして辯明せしめよう。「私は基督教徒から猶太教徒からも共に敵視されてゐる。殊に後者は私がバーデンやナッサウ其他、地方諸邦の猶太族の爲に劍を抜かないからといつて私を憎んでゐる。だが、あゝ何たる淺慮短見ぞ！ローマの都門の外でなければカルタゴを辯護することは出来ないではないか！

君までが私を誤解してゐるのか」(モーゼル宛書信、一八三六年十一月八日、アヴィニョンより④)かくて斯様のハイネの行動の根底には、「當代の猶太問題は一般人類の問題と切り離して考へることは出来ない。即ち兩者は到る處で相互に觸れ合つてゐる。故に特に猶太族解放の問題のみを採り上げて之が達成を企圖することは、既に反時代的な意味に於て不利であり、且つ愚かである」と云ふ時代認識が絶えず一貫して横つてゐたのである。是即ち彼のポリテイクの猶太的基調にして、この見解は、ずつと後年に至るまで彼の保持する所のものであつた。即ち「ルドヴィヒ・マルクス」の「後記」(Ludwig Marcus, Spöternote)に彼は次の如く記してゐる。「猶太人は終には次の如き認識に到達しなければならない、即ち猶太人は基督者の解放が完成せられ保證せられて後、始めて解放せられるものである、と云ふことである。猶太人の問題は獨逸國民の問題と同一である。故に猶太人は獨逸人として彼等が長い間享けて來たものを今猶太人として要求してはならぬ」⑤と。

註 ① H. Bieher : S. 68.

② S. M. Dubnow : S. 110.

③ H. Bieher S. 76.

④ Ibid : S. 116.

⑤ Ibid : S. 268.

六

「此頃ハイネは峻嚴なる猶太主義に對立する享樂的なヘレニスムスの旗手たるの役割を演じて得意になつてゐた」^①とドブノフの指摘せる如く、七月革命以後のハイネの思想的特徴として所謂「ハイネ的ヘレニスムス」(Das Heineschen Hellenismus)が注意される。尤もこの意味の思想傾向は、嚴密には、もつと早い時期迄溯り得るかもしれない。併しハイネが意識的に而も公然とヘレニスムスの遵奉者であつたのは大體一八三〇年以降と見るべきであらう。即ち彼が「ルドヴィヒ・ベルネ覺書」(“Ludwig Börne”)に於て全人類を猶太人と希臘人とに、換言すれば、禁欲的、抽象的、靈的な類型の人間と享樂的、現實的、發展的な類型の人間とに二分し、彼自身は寧ろ希臘的類型に屬する旨を表明した^②時に於てである。

ところで茲に注目すべき事は、所謂ハイネのヘレニスムスが、固有の意味でのヘレニスムスそのものとは可成その性質を異にすると云ふことである。結論から先に云へば、それは現實に若しくは少くとも要求としてヘブライスムスを内包するヘレニスムスであつたと云ふことである。かくの如き論斷に、その哲學的根據を與へたものは、著名なる猶太人哲學者ヘルマン・コーヘン(Hermann Cohen)その人であつた。彼に依れば元來ヘブルの神は「凡てを支配し、凡ての原因である神」換言すれば「凡てのものゝ背後に住む神」であつた。然るに自然哲學の勃興と共に外部に表はれてゐる自然そのものが「背後に住む神」よりも次第に重視せらるゝに至り、終にヘブル哲學の「神」は自然哲學の「自然」の背後に遠く後退して了つた。恰もこの時、この後退した「神」を提けて再び自然哲學の世界に押し出して來た者が、即ちかの猶太人哲學者スピノザであつた。彼の哲學的努力はその「神」をしてこの自然の中の何處に、その正當な地位

を得しむるかにあつた。即ち彼は「神」を「無限の延長と思惟」そのものの中に、云ひ換へれば「自然」そのものの中に置くことに依つて「凡てのもの神」を「凡てである神」としたのである。このスピノザの哲學的業績の中にコーヘンは極めて注目すべき事實を發見したのである。即ち、モーゼの一神教とスピノザの汎神論との間に同じく猶太主義と云ふ一つの内的な紐帶の通つてゐることを看破したのである。而して所謂「ハイネ的ヘレニスムス」とは、彼に依れば實にスピノザの汎神論以外の何物でもないと言ふのである③。その論據は例へば「獨逸宗教哲學の歴史」(Zur Geschichte der Religion und Philosophie in Deutschland)の如き著述に見出され得よう。

即ちその中でハイネは、彼自身若き日から如何にスピノザを熱愛し、その思想的影響を受けたかを述懐し居るのみならず、現にスピノザ的汎神論を殆んどその儘自己のものとして祖述してゐるのである④。かくて「ハイネ的ヘレニスムス」は決して嚴密な意味でのヘレニスムスそのものではなくして、寧ろ之に最も對立的な思潮と一般に考へられてゐるヘブライスムスの流を汲んだ、云はゞヘレニスムスの一變態であると言はれるのである。

さてこの様な論斷は一見甚だ大膽に過ぎるの感なきを得ない。併し乍ら若し吾々が彼の希臘主義的言論に少しく注意を拂ふならばそれが決して過言でなく、少くとも彼が單なるヘレニスチックな一切を以て足れりとせず、そこに何等かの意味でヘブライ的要素の附加せられることを、心の欲求として有つてゐたことに氣付くであらう。例へば「シエクスピアは猶太人であると共に希臘人である。或は、むしろ、その二

つの要素即ち宗教（ヘブライ精神）と藝術（ギリシヤ精神）とが彼に於ては融合して充滿し、更に一層高い全體に迄發展してゐる。恐らくは二要素の斯様な調和的融合が全歐羅巴文明の課題ではなからうか。吾々は併しその様な結果から未だ甚だ遠ざかつてゐる」⑤と嘆じた時に或は又他の個處で、「この對立は茲に於て著しき對をなす。

希臘の快樂主義と猶太の神

……
 おゝ、この闘ひは遂に終局しないのか、

眞實は永へに美と争ふのか⑥

と歎いた時に、そこに吾々はヘレニスムスに滿されずして惱む彼を見ないであらうか。要求は充されねばならぬ。矛盾は克服されねばならぬ。

若し、夫れ、彼の晩年、バリーの「罍の洞穴」(Matrakensult)に縛られつゝ彼がその世界觀を修正した時に、果然、彼の衷なる「猶太人」が再びその「希臘人」の上位に立つに至つた事情に想到するならば、最早思ひ半に過ぐるものがあらう。「希臘に對する私の偏愛は衰へた。私は今にしてやつと悟つた。希臘人は單に美しい若者にすぎなかつたが、猶太人は永遠の青年、只に古に於てのみならず、十八世紀に互る迫害と苦境にも撓まざりし強力な青年であつたことを」⑦。又曰く、「これまで私はモーゼが特別に好きと云ふわけではなかつた。是は恐らく希臘精神が私の心の中で優勢であつたのと、又私が猶太の立法者た

る彼の、あらゆる具象的なもの即ち造形美術に對する嫌惡を許すことが出来なかつたからであらう。

私はこれまでモーゼが藝術を敵視しつゝ、而も彼自身偉大なる藝術家であり、眞の藝術家精神を有つてゐたことを理解しなかつた。只この藝術家精神が彼の場合には埃及人の場合と同様大いなるもの、壞えざるものに向けられたに外ならなかつた。併し彼は埃及人の如くその藝術品を煉瓦や花崗岩で作つたのではなく、「人間のピラミッド」(Menschenpyramiden)を建て「人間のオペリスク」(Menschenobelisken)を刻んだのであつた。貧弱な遊牧の民を素材として、幾百年の戦にも堪へ得る偉大な永遠の聖なる國民を、他のあらゆる國民が否全人類がその龜鑑として之に仕へ得る様な選民を作り上げた。即ち彼はイスラヘルを創造したのである！」^⑧

ヘレニスムの後退である。そしてヘブライスムスの再顯である。政治的活動の自由の爲に永い間隠蔽され、抑壓され、幾分は歪曲されさへもして來た若き日の猶太的純情が再び彼の魂の王座に甦つて來たのである。

註 ① Dubnow : Die neueste des Jüdischen Volkes, P. II, S. 112.

② H. Bieher : H. jüdisch Heine confesso Jüden, S. 91.

③ H. rmann Cohen : Jüdische Schriften, (Heinrich Heine und das Judentum) SS. 6—10, S. 17.

④ H. Bieher : SS. 108—110, (aus " Zur Geschichte der Religion und Philosophie in Deutschland, Erstes Buch,)

⑤ H. Bieher : S. 96.

⑥ Ibid : SS. 271—274.

⑦ Ibid : S. 275.

⑧ Ibid: SS, 256 - 275.

七

以上吾々はハイネの猶太思想を中心として、ハイネとその時代の猶太族との關係を概観しえた積りであるが、之を要するにハイネはその胸底深き所に於ては同族とその文化に對する關心及び篤實を決して忘れなかつたのであるが、表面的には、概して冷淡に振舞ひ、時としては、殊更にその冷淡なる自己を強調しさへした様であつた。即ち彼は、モーゼスメンデルスゾーン (Moses Mendelssohn) 以來獨逸猶太族間の中心問題であつた猶太教改革運動に對しても、特に積極的な意志乃至行動の表示を與へず、從つて近世猶太思想史上に幾何かの思想的遺産を附加したと云ふわけでもなく、さりとて又彼がその生涯の主要部分を擧げて之に消費した自由主義運動に於ても、結局時代の猶太族解放の爲に、指摘し得る程の著しい政治的効果を齎した譯でもなくかくて彼の外部的活動の一切は、必しも特に猶太族のためになされた様には見えなかつたのである。之に據つて之を觀れば彼がベルネやマルクス (Karl Marx) と共に猶太史上屢々「局外者」(Ausensehende) としての取扱ひを受けて來たことも亦全く故なしとしないであらう。併し乍ら、より嚴正なる評價は、勿論、今少し内面的な解剖と、全體的な觀察の後に下されねばならぬであらう。彼が内面的には全く獨逸猶太族の味方であり、思想的にも本質的には猶太主義の遵奉者であつたことは、既に明めた通りである。ところで顯はれたる彼の外部的活動の中からも吾々は彼の猶太的意義性乃至は猶太史的

寄與を發見し得ないであらうか。

由來猶太族の永き苦難の歴史は、一篇の大なる悲劇たるを失はない。近古猶太族解放運動史も亦畢竟近世猶太族迫害受難史そのものであり、近世猶太族特殊化史以外の何物としても終らなかつた。蓋し近世獨逸猶太族解放運動は結局、外に向つては、只基督教徒の迫害心を一層刺戟すべく役立つたにすぎず、内に向つては、只反歐化主義、民族特殊化に一段と拍車を加ふべく作用したにすぎなかつた。かゝる歴史的事情の下に於ては歐羅巴世界への妥協乃至讓歩に依る一切の解放運動は、要するに無意味であり、かくて寧ろ歐羅巴文化世界に先づ挑戦し次に勝利することそのものこそ、向後の猶太族が同族のために採り得る唯一のそして最後の途であることが氣附かれた。而して斯の如き新たる同胞救済策の發見者こそ實に外ならぬわがハインリッヒ・ハイネその人であつた。一人の蔑視されたる獨逸猶太族の子が、その血統にも拘らず二國語を自由に使驅する文學者たり得、十九世紀前半期獨逸の最も秀でたる政論家又思想家たり得たことそのことに依つて、嘗つてメンデルスゾーンが思想の世界で果した勝利の大業を今一度文藝の世界で果した彼。恐らく彼以前の如何なる猶太族も經驗しなかつたであらう比類なき文學的榮譽の獲得に依つて、今や猶太族が歐羅巴諸國民に比肩して何等の遜色なく、否、進んでは彼等を遙に凌駕し得ることの現實的事例を提供し、延いては社會的生活、政治的世界に於ても、最早や猶太族に權利の同等が許容さるべきことの當然性を世界に示した彼である。洵にハイネの勝利は猶太族とその文化の勝利であり、猶太史の光榮でなければならぬ。吾々は此の點に於て彼の顯著にして且つ特異なる猶太史地位を認めたく思ふ。